

浅井閑右衛門展 空想の饗宴

練馬区立美術館（中村橋） 2016.09.18～11.13



朝井閑右衛門展 ● 空想の饗宴

「浅井閑右衛門」(1901～83)は、美術学校で正
当な美術教育を受けることなく独学で絵画を修
得し、25歳時に公募展の「二科展」に初入選して
頭角を現した画家である。

画伯は、いまだ謎が多くて若年時の詳しい足跡
は不明で、晩年は作品が売れたが、生前は一冊の
「画集」を出すことは無く、「個展」はほとんど
行わず、美術館から「展覧会」の依頼がきても、
「生きているうちはやらない」と断り続け、ひた
すらキャンバスに向かって制作に没頭した少
し変わった画家である。

本展は、初期から晩年まで独自の地歩を築いた
画業を紹介し、併せて没後遺族に守られ鎌倉のア

トリエを撮影した写真や、お気に入りの品々を展示しながら、画伯の独走の世
界に生きた画業を回顧展として軌跡を見ることができる。



Photo: Hatsuhiko Okada
浅井閑右衛門

《丘の上》 1936年写真上 油彩／カンヴァス
文部大臣賞を受賞した出世作

本作品は、“音楽を奏でる男たちと、演奏に合わせて踊る女性たち、背景には神殿らしき廃墟があり花が咲いて陽気で生を謳歌している”様子を描いた100号の巨大な群像作品である。

画伯は、本展のタイトル「空想の饗宴」が暗示する
ように、自己の想像世界に遊び、数年間をすごした練
馬のアトリエで製作され、当時完成したばかりの「新
橋第一ホテル」のロビーを華々しく飾っていた。

《薔薇（嘉靖青花唐子紋中壺）》 写真下 1983年 油彩／カンヴァス

「閑右衛門」といえば薔薇というほど薔薇をよく描いており、他に電線や道
化に興味を持ち繰り返しモチーフにしていたが、とりわけ薔薇を好み、絶筆の
「薔薇」は赤や白などの色が溢れるように湧き出て鮮烈で、油絵具を執拗に塗
り固めレリーフのように盛り上がっている作品である。画伯は「単に薔薇を描
くのではなく、画面の上で新種の薔薇を咲かせている」としている。